AP/FD NEWS LETTER

横浜国立大学
高大接続・全学教育推進センター

2021.10
Vol.16

CONTENTS

P1　巻頭言　原点に回帰した教育改善の取り組みを
理事（教育担当）・副学長　谷地　弘安

P2　春学期授業アンケートおよび自己点検票の結果報告
高大接続・全学教育推進センター　安野　舞子

P6　学修成果の可視化と学生IR体制の完成を目指して
大学院教育強化推進センター/高大接続・全学教育推進センター　市村　光之

P8　CENTER NEWS

原点に回帰した教育改善の取り組みを

教育担当理事・副学長　谷地　弘安

本年度より教育担当理事・副学長をしております、谷地と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

昨年度は「コロナに始まり、コロナに終わる」、まさにコロナ禍一色のなか、試行錯誤で大学教育が進められました。

各学部、各大学院がそれぞれ特色ある教育を進めてきたなか、総じてキャンパスでの集合教育が難しくなり、オンラインを活用した授業、授業支援システムを活用した学生とのコミュニケーションや授業管理という、未曾有の経験をすることになりました。

コロナ禍での授業のあり方には、どのようなものがあるか？―そこにはメリット・デメリットがあります。それを理解してこそ、質の高い教育を提供することができますが、大学全体でそのあたりの知を高めることは、今後のFDにおける基本的なテーマとなりましょう。すでにその分析はスタートしています。無論、このコインのもう一面には、オンライン授業に対する学生のみなさんの意識・考え方、実際の取り組みに関する情報も必要になります。

前提とする要件が一気に変化したこともあり、教育改善もまた、いわば原点に回帰して取り組むところにあると考えております。みなさまのご協力を得ながら、高質なフィードバックができるよう、担当理事としてもコミットして参りたいと思っております。重ねてどうぞよろしくお願いいたします。

今回のニュースレターですが、テーマの1つめは「春学期授業アンケートおよび自己点検票の結果報告」です。昨年度の完全オンラインに対して、今年度は対面とオンライン併用で授業が実施されてきました。両者の違いについて、授業アンケートの結果から、特徴的なものを報告します。自己点検票についても、授業の方法それぞれについて、担当教員の反応に関して特徴を報告します。

２つめは「学修成果の可視化と学生IR」です。これまで、学生プロファイルは学部生を対象としてきましたが、本年度からは大学院生にも対象を拡大しています。今回は、大学院生の研究・生活行動などに関して、報告がなされます。また、10月から「BEVI（Beliefs, Events and Values Inventory）」と呼ばれる、グローバル・コンピテンシー等を測定する心理アセスメントが全学で導入されています。氷山にたとえると、学士力と就業力は海面上に現れたもので、比較的自覚しやすい学修成果です。一方、BEVIは海面下にあって自覚しにくい意識や価値観を明らかにするものです。これについて紹介しています。なお、これをもって、学修成果の可視化、学生IRの仕組みが一通り完成することになりました。

このニュースレターをこれからの教育改善に役立てていただければ、幸いです。

春学期授業アンケートおよび自己点検票の結果報告

高大接続・全学教育推進センター　安野　舞子

はじめに

可能な限り対面授業を実施することになった2021年度春学期。感拡大防止対策をしっかり講じ、途中、全学的に遠隔授業に移行することもなく、なんとか春学期を終えることができました。したがって、ほぼ遠隔で行った昨年度とは異なり、春学期は対面と遠隔の様々な授業形態が混在する中で授業が展開されるという、これもまた、本学始まって以来の初めての経験となりました。その春学期の授業を、学生そして教員はどのように評価したのでしょうか。本稿では、「学生による授業アンケート」および「授業アンケートの結果に基づく自己点検票」の結果についてご報告させていただきます。

春学期授業アンケートの結果について

1）授業アンケート実施概要

実施期間：2021年７月19日～８月13日

開講部局	対象科目数	実施科目数	実施率	実施科目の受講者数	回答者数	回答率
全体	954	866	90.8%	62409	18781	30.1%
教育学部	112	109	97.3%	5314	1603	30.2%
経済学部	65	58	89.2%	5754	937	16.3%
経営学部	53	49	92.5%	8185	2034	24.9%
理工学部	271	253	93.4%	20218	7609	37.6%
都市科学部	112	97	86.6%	5416	1250	23.1%
短期留学プログラム(JOY)	1	0	0%	–	–	–
全学教育	340	300	88.2%	17522	5348	30.5%

今年度春学期は、開講科目の６割以上が対面で行われたようですが（次項参照）、昨年度、授業支援システムを使って全面的に遠隔授業が行われたこともあり、そのまま今年度も同システムを活用する科目が多かったのか、授業アンケートの春学期実施率は約90％（全体平均）と、高い数値となりました。しかし、回答率については、Web化以降、年々低下しており、今回は30.1％（全体平均）で、昨年度春学期の36.3%よりも更に低い結果でした。後に自己点検票の節でも述べますが、回答率が低いと結果の信頼性が低下してしまうため、今後、回答率向上に向けた取り組みが必要になると考えています。

2）アンケート結果からみる授業の実施形態

春学期は、可能な限り対面授業を実施することになっていたことから、授業アンケートでは対面、遠隔いずれの形式で当該授業が実施されたかを尋ねました。その結果、全体的に約６割の科目が対面で授業を実施していましたが（図１）、学部別にみると、対面と遠隔の実施割合にかなりの違いがあることが分かりました（図２）。

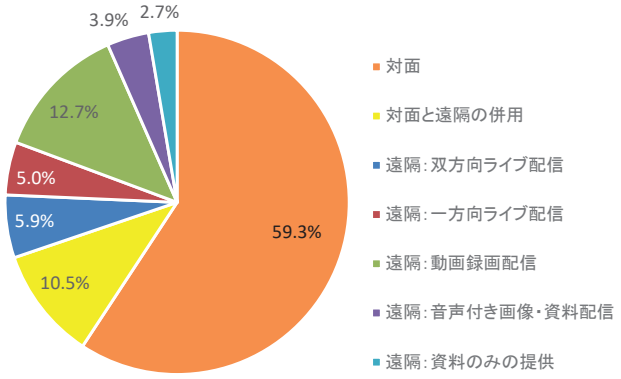


図1　授業の実施形態の内訳（全体）

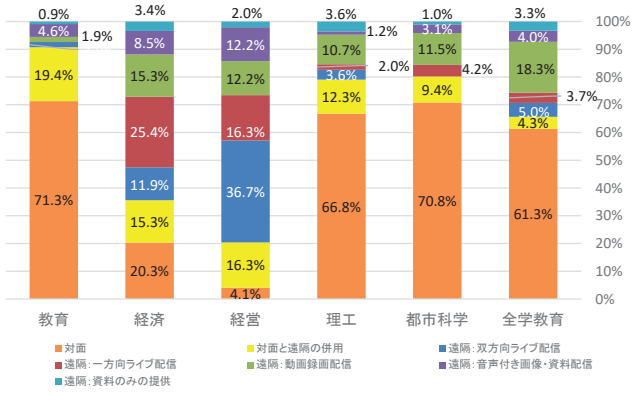


図2　開講部局別　授業の実施形態の内訳

3）１回の授業あたりの学習時間

昨年度に引き続き、授業外学習時間については「1回の授業あたりにどれだけの学習時間を費やしたか」という聞き方で尋ねました。授業形態別にみると、全体的に対面授業の平均値が最も高く（128分）、次いで遠隔双方向ライブ配信（123分）でした（図３）。

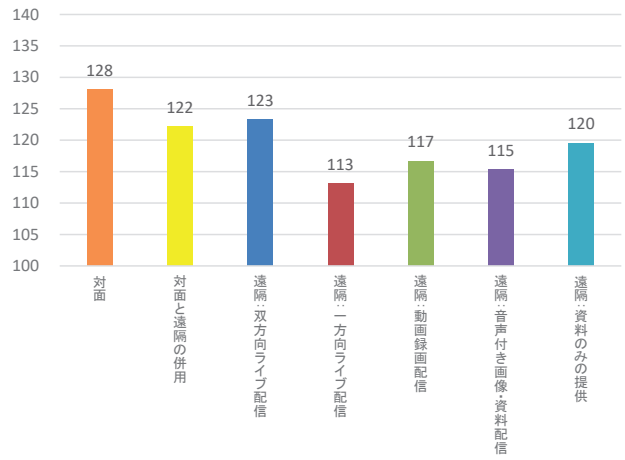


図３　授業形態別　平均学習時間（分）

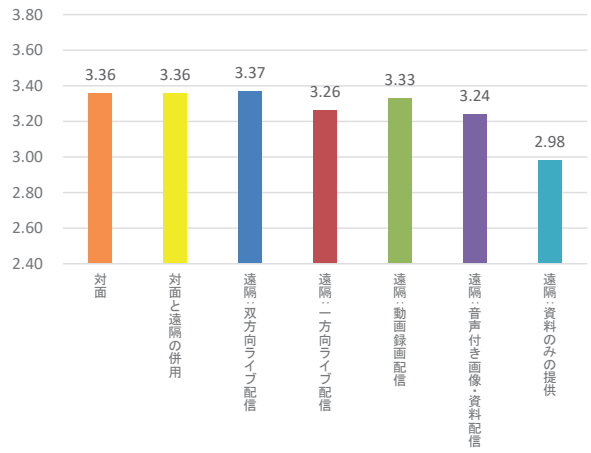


図５　授業内容に関する満足度平均値

４）「学修意欲や身についた力」と「授業満足度」

「学習意欲や身についた力」とは以下４つの項目ですが

Ｑ２　授業の履修目標（成績評価の「優」のレベル）に到達するために、意欲的に授業や課題に取り組みましたか。

Ｑ３　授業の到達目標（成績評価の「可」のレベル）に掲げられていた知識や能力が身についたと思いますか。

Ｑ４　授業の内容を理解できたと思いますか。

Ｑ５　授業で対象とする学問領域への興味や関心が喚起されましたか。

（選択肢は「非常にそう思う」(4) ～「まったくそう思わない」(1) の４件法）

Ｑ２～Ｑ５までの全ての項目において、双方向ライブ配信の科目群の平均値が全体平均値を上回っており、一方、資料のみの提供科目群はすべての項目において最も低い値でした（図４）。一方、総合評価としての満足度をみると、対面、遠隔ライブ、遠隔オンデマンドいずれもほとんど同じような数値でしたが、遠隔オンデマンドの資料のみの提供科目群は明らかに他の科目群に比べて低い数値でした（図５）。

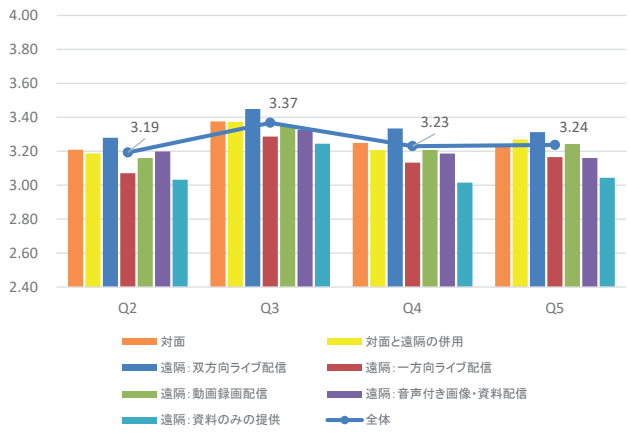


図４　学習意欲や身についた力に関する平均値

以上の結果から、春学期は半数以上の科目が対面で行われていましたが、１回の授業あたりの学習時間の平均値については、全体的には遠隔よりも対面の方が若干高い傾向が見られたものの、「授業満足度」については、資料のみの提供である遠隔オンデマンド科目を除くと、対面・遠隔ともほぼ変わらないということが言えるかも知れません。一方で、遠隔授業については、「対面授業に相当する授業」を行うことが期待されていますが、「学習意欲や身についた力」に関しては、双方向ライブ配信の授業の平均値が、オンデマンド型授業だけでなく対面授業の平均値よりも一律に高いという結果が出ており、このことについて、双方向ライブ配信授業のどのような要素がそうした結果を導き出しているのか、今後より深い分析をしていく必要があると考えています。

春学期自己点検票の結果について

１）自己点検票実施概要

実施期間：2021年８月13日～９月14日

対象者：春学期授業アンケートを実施した科目の担当教員

	対象科目数	提出科目数	提出率	常勤/非常勤内訳
全体	866	401	46.3%	243/158
経済学部	58	49	84.5%	24/25
経営学部	49	26	53.1%	17/9
教育人間科学部	109	7	53.2%	0/7
教育学部		51		32/19
理工学部	253	135	53.4%	107/28
都市科学部	97	50	51.5%	38/12
国際戦略推進機構	300	65	27.7%	15/50
全学センター系		18		9/10

※「対象科目」は開講部局別、「提出科目」は教員所属部局別に集計

自己点検票は、「本学の授業改善に向けてのＦＤ活動は、学生による授業アンケートの実施、アンケート集計結果の受領、そして授業アンケート結果に基づく自己点検票の作成が一体となっている」として、毎回、授業アンケート実施期間が終了した直後から、アンケートを実施していただいた先生方に対して作成のお願いをしてい

ます。授業支援システムを利用して自己点検票に入力する方法は2019年度秋学期から始まりましたが、提出率については一時落ち込んだものの、2019秋：38.4%→2020春：28.2%→2020秋：39.0%→2021春：46.3%と、今回は最も高い提出率でした。

自己点検票では、まず「授業アンケートの集計結果（各設問回答の平均値）」および「授業アンケートの自由記述内容」について、それぞれが「おおむね妥当」なのか「妥当とはいえないものもある」のか、もしくは「どちらとも言えない」のかについて、当てはまるものにチェックした上で、任意で集計結果や自由記述内容に対する所見を記述していただいています。そして、最後に「改善に向けた今後の方針」について、「改善・工夫の必要あり」、「改善・工夫の必要なし／現状維持」、「次年度は開講しない」のいずれに当てはまるかをチェックし、任意で具体的な方針について記述していただいています。次項以降では、各項目の任意記述欄に書かれていた内容について、特に特徴的なものについてご紹介していきます。

2）回答率に対する懸念

「授業アンケートの集計結果（各設問回答の平均値）」に対する任意記述の中で散見されたのが、「回答率の低さ」に対する声でした。「回答数が少ないため、授業の振り返りとしてはあまり役に立たない。」、「回答率が低いので、なんとも言えない。」というコメントがある一方で、自らの周知不足のため、回答率が振るわなかったことを反省するコメントもありました。しかし、「授業アンケートに回答するよう授業内で依頼したにもかかわらず、回答率が低く残念だ。」という声もあり、「何らかのインセンティブが無いと回答率が上がらないように思われる。」というコメントは、確かにそうなのかも知れません。なお、“インセンティブ”ということではありませんが、「アンケートを開かないと第15回の出席パスワードが分からないようにしたため、80件の有効回答が得られた。」というコメントがあり、このように回答率を上げる工夫もなされています。

3）各授業形態における工夫・改善

今年度春学期は、可能な限り対面授業が実施された一方で、遠隔授業もある程度の割合で行われていました。そこで、自己点検票では「この科目はどのような授業方法で実施しましたか」と尋ね、対面・遠隔のどちらで行ったのか分かるようにしました。以下、それぞれの授業形態でどのように工夫して授業が実施されたのか、また、今後どのように授業を改善するのかについて、「授業アンケートの自由記述内容」および「改善に向けた今後の方針」に対する任意記述から抜粋して、ご紹介いたします。

【対面】

自由記述にも「〇〇学への関心が深まった」などの回答が多かったが、特に今年度は対面授業を実施することができ、感染に十分気を付けながら体験学習や個人発表、グループディスカッションを行えたことが授業への関心の深まりに対して良い効果を与えた要因の一つであると考えている。授業中の学生の様子からも、他学生の発表を熱心に聴いている様子が伝わり、対面授業の大切さを例年以上に実感した。

（教育学部、受講者人数１-20名の科目）

【対面と遠隔の併用】

反転授業＊を実施したが、意見が下記に分かれた。

・反転授業は効率が良い
・授業内容がオンラインビデオなら演習もオンラインで良い

昨年に完全オンラインを経験しているので、対面の価値を見出せない学生もいることが分かった。反転授業は積極的な学生には効果が高いが、非積極的な学生は授業への価値を見出すのが難しい。完全に反転授業にすると、事前に授業ビデオを見ない学生を取りこぼしてしまうため、【授業ビデオのレビュー＋演習】として半反転授業を試す。

（理工学部、受講者人数51-100名の科目）

【遠隔：双方向ライブ配信】

音声付き資料（動画）を予め配信して事前に学習をしたあと、オンラインリアルタイムで補足的に解説したりブレイクアウトルームでディスカッションをしたりしているが、意外とその方法が良かったようです。新型コロナの感染拡大が落ち着いてきたら、同様のことをハイフレックスでやってみようと思います。

（経済学部、受講者人数１-20名の科目）

【遠隔：動画録画配信】

動画を視聴してもらうにあたっては、適度に休憩を挟むことが集中力を維持する点で有効。毎回ワークシートに書き込む方法をとっている。ただ動画を見ているだけよりも手を動かす方が授業に参加している感覚があるのだと思う。ワークシート方式は、一回の講義の範囲が把握できることがよいようだ。

（理工学部、受講者人数51-100名の科目）

4）対面・遠隔授業に対する学生・教員それぞれの思い

「授業アンケートの自由記述内容」に対する任意記述の中で、「対面と遠隔のどちらを好むか」について学生にアンケートをとった結果を紹介するコメントがありましたが、そこに紹介されていた学生からの意見は、昨年来、当センターで学生たちに意見を聞き取り、見えてきた内容とほぼ合致するものでした。また、それに対するこのコメントを書かれた教員の思いは、「理想と現実」を如実に物語っていると思い、ここにご紹介させていただきます：

対面とオンデマンドなら、どちらが良いのだろうと思ってアンケートを取ったが、学生の本音としては「どちらもやってほしい、それで、その時々に合わせて好きなものを選びたい。」な気がします。

対面の方が一緒に勉強している人がいて、やる気になる。しかし、一度しか聞けないので復習しにくい。
オンデマンドの方が何回も確認できるから勉強になる。しかし、あとでやろうと思っていると行わなければいけないものがどんどん増えていく。

なので、教員の負担を考えなければ対面でライブ配信をして、それを録画で復習用に配るのが良いのかなとは思います。
ただし、教員の仕事は授業作成だけではないので、私には負担が大きいとは思います。
（理工学部、受講者人数51-100名の科目）

おわりに

本稿では、対面授業の実施に大きく舵を切った今年度春学期について、授業アンケートと自己点検票の結果をもとに、学生はどのように学び授業を評価したのか、教員は授業をどのように振り返ったのかについてまとめました。本年夏の新型コロナウイルスの急激な感染拡大の悪化により、秋学期は遠隔授業が増えることとなりましたが、対面・遠隔授業のそれぞれの良さを活かしながら、引き続き、学生の学びを深める授業が各科目で展開されていくことを念願しております。

＊筆者注：「反転授業」とは
従来教室の中で行われていた授業学習と、演習や課題など宿題として課される授業外学習とを入れ替えた教授学習の様式。アクティブラーニング型授業の一つとされている。
出典：http://smizok.net/education/subpages/a00029(flipped).html

学修成果の可視化と学生IR体制の完成を目指して

大学院教育強化推進センター/高大接続・全学教育推進センター　市村　光之

高大接続・全学教育推進センターでは、平成26年度に文部科学省の大学教育再生加速プログラム（AP事業）に採択されて以来、「テーマⅡ：学修成果の可視化」に取り組んできました。AP事業は令和２年３月に完了し、事後評価において、テーマⅡ採択校で唯一Ｓ評価を獲得することができました。関係部局の皆様のご協力のお陰と感謝しております。AP事業と連動し、平成29年度秋学期よりYNU学生ポートフォリオに、学生が主体的な学びをデザインするツールとして《学生プロファイル》を導入しました。学生プロファイルは、大学にとっては学生の学修行動や学修成果を収集・分析し、教育改善に結びつけるツールであり、《学生IR》と呼んでその体制の構築に努めてきました。

第３期中期計画の最終年度に当たる今年、教務厚生部会の承認を得て、学修成果の可視化と学生IR体制の、少なくとも「第１期」の完成を目指す取り組みを２つ実施しました。今回は、その報告になります。

学生プロファイルの大学院への導入

平成30年度の改組により、大学院の全学組織として大学院教育強化推進センターが、大学院IR部門と教育開発・学修支援部門の２部門体制で発足しました。大学院IR部門では、「高い応用力と発想力を有する高度専門職業人の育成」という教育研究目標を踏まえ、大学院生の就業力の課題を把握すべく、学部３年生に実施してきた就業力アセスメント（外部テスト）を、センター発足年度にいち早く大学院生に拡大導入しました。

合わせて、研究活動等の実態や課題を把握し、教育改善の基礎資料を提供すべく、学生IRの大学院版の準備を進めてきました。そして、今年度の４月より、全大学院生を対象にした学生プロファイルの大学院版の導入に漕ぎつけました。これにより、大学入学から学士課程、大学院修士/博士課程前期/後期、さらに卒業後を一貫して見通す学生IR体制が完成形に近づいたと考えています。

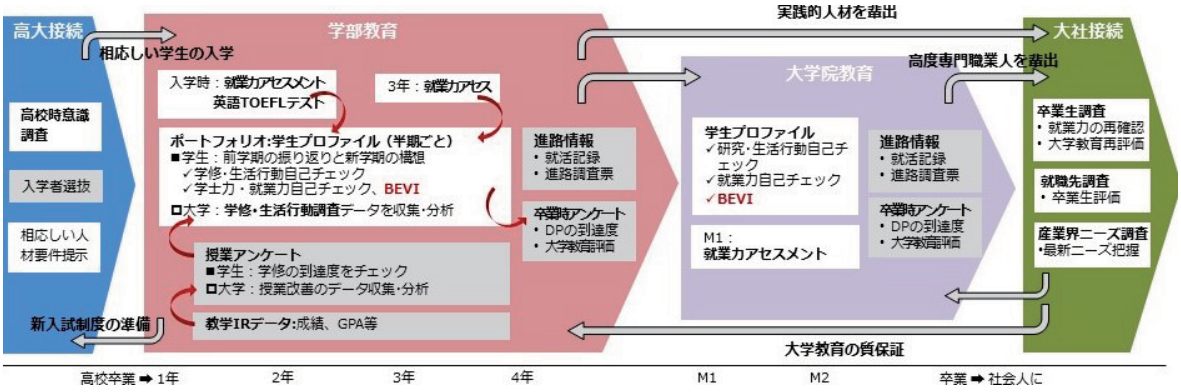
学部生版の学生プロファイルは、学生が主体的な学びをデザインするツールとしての機能が主です。一方、大学院版は主体的な学びの姿勢はすでに身についている前提で、学生IR情報の収集ツールの比重を大きくしています。

春学期の学生プロファイルでは、「研究･生活行動自己チェックシート」により、研究活動や研究生活の実態を調査します。この春は、学部生同様、研究・生活時間の実態を把握すると共に、研究活動の満足度とその要因を調査しました。その結果、研究活動を充実させるには、私生活とのバランスをベースに、取り組む研究に意義を見出していることと、指導教員に相談できやすい人間関係が保たれていることが大切であることがわかりました。加えて、英語による授業への適応状況も調査しました。やはり、英語による授業では、議論やレポート等の作成に困難を感じる日本人学生が多く、今後の大学院教育の改善課題になりそうです。詳細は、「2021春_大学院生_意識行動調査」にまとめ、以下に公開していますので、ご参照ください。

サイボウズ・ガルーン＞ファイル管理＞大学院教育強化推進センター＞学生プロファイル＞2021年度

秋学期の学生プロファイルでは、「就業力自己チェックシート」（学生用と同じ）と「心理アセスメント：BEVI」（次節で説明）を受検します。これらは、将来、

高大接続から学部教育、大学院教育、卒業後まで、学生にフォーカスし一貫して見通す学生IR システム



高度専門職業人として社会に貢献するために、自分自身の特徴や強み・弱みの自覚を促すためのツールです。

心理アセスメント：BEVIの試行実施

この秋、10月実施の学生プロファイルでは、学部生、大学院生共に、心理アセスメントBEVI：Beliefs, Events, and Values Inventoryを試行実施しています。BEVIは、米国の心理学者グループにより開発されたグローバル･コンピテンシーなどを測る心理テストです。近年、海外で活躍できる人材が求められていますが、多様な文化的背景を持つ人々との協働で必要なのは言語力だけではありません。むしろ、主体的に異文化に適応する資質、意識や価値観など、日ごろ認識しにくい要素が重要です。そうした自分では気づきにくい面を自覚するためのツールがBEVIです。

ここ数年で、文科省や主要な大学でも注目され始め、日本語版を開発した広島大学をはじめ、東京大、大阪大、筑波大、一橋大、国際教養大、上智大などで導入されています。留学など海外プログラムの学修成果の測定ツールとして利用する大学が多いです。筆者は、担当するキャリア教育科目で２年前から履修生に受検してもらい、レポートを書かせる試みをしてきました。その結果、グローバル･コンピテンシーに限らず、自分では意識できない資質や価値観などに気づくことができてよかった、との声が多く、全学導入に踏み切った次第です。

学部生向け学生プロファイルでは、春学期は「学士力自己チェック」、秋学期は「就業力自己チェック」の複眼で、学生が学修成果を可視化できるようにしています。学士力や就業力は能力、スキルとして自覚しやすく、氷山モデルに例えると、海面上に見えている、いわば氷山の一角です。海面下は学生それぞれの内面であり、さらに大きな何かが隠れています。BEVIはその内面に光を当て、ものの考えかた、価値観、信念など見えない部分の自覚を促すためのツールです。学生プロファイルの

企画者として筆者は、学士力と就業力にBEVIが加わることで、学生の皆さんに提供する学修成果の可視化ツールが完成形になると期待しています。

BEVIでは下表に示した７つの尺度で、受検者の資質などを測定しています。①②は受検者の深い胸の内にあるもの、③～⑤が社会生活上の基本的傾向、⑥⑦がグローバル･コンピテンシーに相当します。大学側には、世界140か国、２万人の受検データを元にした偏差値で、７つの尺度ごとに学部・学年別の平均スコアが提供されます。集計がまとまりましたら、報告させていただきます。

学生側は、受験完了直後からBEVIサイト上で結果レポートを閲覧できます。レポートでは、７つの尺度に沿って文章で受検結果が説明されます。各尺度の測定スコアは提供されません。これは、スコアの高低にのみに一喜一憂して終わることなく、自分自身の現在のありようを受け止めることが何より大切、という意図からです(実は、次年度からスコアも提供される予定なのですが)。

BEVIの受検後、学生たちは学生プロファイルに戻り「振り返りシート」を記入します。今回は就業力自己チェックとBEVIを受検しますので、それらの結果から得た気づきを言語化することで、主体的な学びのツールとして活用していただければと願っています。いずれにしても、今回は試行導入です。学生の皆さんの受検後の反応を踏まえて、次年度以降の方針を決めます。

BEVI の尺度	各尺度の内容
① 形成的変数 ② 中核的な欲求	• あなた自身のアイデンティティ、自己受容性、自尊感情、自己肯定感、開放性、客観的思考、公正な判断など • あなたの思考や行動の源にあるものを表す
③ 不均衡の許容	• 他者や社会への開放性、レジリエンス、分析力、自己効力感など • ある出来事に対処する態度の傾向を「確信型」「懐疑型」の2タイプで表す
④ 行動の動機	• 批判的・論理思考、課題発見・解決能力、分析力、複眼的視野など • ものごとを捉える上での思考の傾向を表す
⑤ 自分自身や自分の考え、感情、欲求	• 主体性、自己統制力・自律心、好奇心、探求力、創造力、柔軟性など • 自分の感情や欲求を表出する際の傾向を表す
⑥ 他者の思いや感情	• 異文化理解、多様性への寛容、柔軟性、倫理観など • 宗教、ジェンダー、政治また人種の問題に関する傾向を表す
⑦ より広い世界を知る	• 異文化理解・感受性・適応力、チャレンジ精神、チームワーク、コミュニケーション能力、開放性、責任感など • 環境や自然界に対する姿勢、世界に関与する傾向を表す

CENTER NEWS

開催報告 2021年度 横浜4大学 第7回ヨコハマFDフォーラム

本学は、横浜市内にある３つの大学(神奈川大学、関東学院大学及び横浜市立大学)とFD活動の連携に関する包括協定を締結し、FDに関わる活動を進めています。その活動の一環として、毎年度「ヨコハマFDフォーラム」を開催していますが、今年度は以下の要領で開催することとなりました。

開催日時：令和３年12月４日（土）13:00～16:30
開催方法：オンライン ライブ配信
テーマ：大学における教養教育を、今一度、考える。
～学生とともに考えるウィズ＆ポストコロナ時代の大学教育～
開催趣旨：
新型コロナウイルス感染症の影響により、昨年度はほとんどの大学で全面オンラン授業を経験した。この経験により、対面でなければ難しい授業もあれば、必ずしも対面でなくとも実施できる授業、もしくはむしろオンラインの方が適している授業もある、ということが浮き彫りになった。その中でも特に、伝統的に大人数クラスで座学式の教養教育科目については、動画等によるオンデマンド型授業で良いのではないか、という声も聞かれるようになったが、安易なオンデマンド化は、大学の存在意義がなくなる恐れを孕んでいる。一方、教養教育には少人数の語学科目、「教養ゼミ」のような演習科目、「初年次ゼミナール」といった初年次教育科目のように、様々な種類・形態の授業が存在する。よって、大人数の講義科目も含めて、“ポストコロナ時代”を見据え、今後どのように教養教育を行なっていくべきかという議論も必要である。そこで、本フォーラムでは、大学教育における教養教育の「あり方」や「実施方法」等について学生も交えて議論しながら、ウィズ＆ポストコロナ時代の大学教育のあるべき姿ついて考えてみたい。

本フォーラムの詳細は、チラシ等の案内資料が完成次第、各部局の事務方を通してご連絡いたします。なお、今年度は本学が幹事校となります。一人でも多く本学関係者（教職員・学生）にご参加いただきたく、皆さまお声がけの上、ぜひご参加ください。

― 高大センターからのお知らせ ―

【2021年度秋学期授業アンケートの実施について】

第4ターム：2021年11月19日（金）～12月9日（木）
第5ターム／秋セメスター：2022年1月19日（水）～2月15日（火）
※授業アンケート実施対象科目は、ゼミ、教育実習、卒業研究関連科目を除く、履修者10名以上の科目となります。対象科目であれば、授業支援システムの講義編集画面に自動的に登録されます。万が一、対象科目であるにも拘らず講義編集画面にアンケートフォームが表示されない場合は、高大接続・全学教育推進センターまでメールにてご連絡ください（aec-fd@ynu.ac.jp）。

【学生IR、FD活動の報告書類の公開】

学生の学修・生活行動の分析結果や卒業・就職先調査結果など、各種学生IRおよびFD関連の情報は、関連する会議体や教授会でのFDセミナーにおいて報告しておりますが、よりタイムリーに関係各部局に展開すべく、サイボーズ内に公開フォルダを設け、関係各部局にて適宜参照・入手できるようにしています。必要に応じて学生サポートや教育改善にご活用ください。

■ 格納先：サイボーズ＞ ファイル管理 ＞ 高大接続・全学教育推進センター
■ 提供文書の取り扱い：学内限定公開（本学教職員のみ）を含みます。学内限定公開文書のダウンロード後の取り扱いについてはご配慮ください。

横浜国立大学 AP/FDニュースレター 第16号（通号42号）
発行：令和３年（2021）年 10月　編集・制作：高大接続・全学教育推進センター
Email：aec-fd@ynu.ac.jp
ホームページ：www.yec.ynu.ac.jp
大学教育再生加速プログラム